減らせ突然死

AED
推進フォーラム2022

［あなたも私も救命サポーター：
全国に拡がるteam ASUKA］

公益財団法人
日本AED財団

減らせ突然死

AED
推進フォーラム2022

あなたも私も救命サポーター：
全国に拡がるteam ASUKA

ご挨拶

名誉総裁
高円宮妃殿下

新型コロナウイルスの影響で私どもの生活は一変してしまいました。世界中がそうであり、元の生活に戻ることはしばらくないでしょう。ソーシャルディスタンスをとる、お互いに触らない、といった生活規範が求められてきました。リモートで解決できることはいろいろとありますし、リモートのメリットというのも様々なところで見られてはおりますが、救命にかぎっては、ソーシャルディスタンスやリモートは不可能です。どうしても手を触れなければできないことの典型かもしれません。

明らかに非日常的な緊急時に対応するためには、知識はもちろんのこと、常日頃からイメージトレーニングを行う必要があります。「お医者さんいませんか?」という声が上がったら、一瞬固まってしまうことでしょう。医師がいるのであれば自分は動かない方がよい、と思ってしまいそうです。ただ、そうした戸惑いのために止まってしまった1分が、致命的な1分になる恐れがあります。緊急時にすぐに動くことを徹底し、考える前に体が動かせるイメージトレーニングをしておくことが求められます。

そもそも救命の経験がある人は少なく、皆が初心者です。初心者が人様の命を左右するというプレッシャーは相当に強いはずです。どのようにしたらプレッシャーをはねのけて手を貸すことができるかを後押しするのが、日本AED財団の役目です。手を貸しても決して今の状態より悪くはならないという確信を持つことはとても重要であり、そういった認識を広めていくところからスタートするのが得策のように感じます。

人に触るという文化は日本にはないため、緊急時であっても海外に比べて躊躇しがちです。また、日本人は集団で行動する傾向にあるため、数人いる中で一人が先頭を切って動くことをなかなかいたしません。むしろそのような特徴を逆手に、そばにいる人を仲間とし、お互いに声を掛け合えば、全員が初心者であっても動くことができるかもしれません。日本AED財団の推進している救命サポータープロジェクトにより、一人でも多くの方の命を救うことができますように、国民の一人一人がその思いを共有できることを願っています。

AED推進フォーラム2022を終えて

会長
岡本　　保

理事長
三田村 秀雄

ようやく収束の兆しが見えてきたと思われた新型コロナウイルスですが、11月より第8波に入り、再び患者数が急増いたしました。AED推進フォーラム2022は、そうしたなか、感染拡大防止に最大限に気を使いながらの開催となりました。

設立以来、日本AED財団は、突然の心停止に陥った方々の命をいかにしてその場で救うかに腐心してまいりました。AEDの設置を促し、学校やマラソンをはじめとするいくつかのスポーツの現場で速やかに救命処置が施せるように、環境づくりや対応指針の提案などに力を入れ、その結果、これらの場面では救命の確率は高くなりました。

一方で、AEDの設置率が向上しているにもかかわらず、使用率はそれほどでもないというデータを前に、まだまだやるべきことがある、より力をいれなくてはならないという思いに駆られます。

一体、AEDの使用率を上げる鍵は何なのでしょうか？　見知らぬ多くの人々が行き交う日常生活の場面で、人が突然倒れたら、居合わせた人の頭は真っ白になってしまいます。AEDの設置場所がわからない、せっかく見つけたAEDも講習を受けて使えるはずだったのに使えない。そのような緊迫した場面では、常日頃から知識を得て置くことはもちろんですが、その他に知らない者同士が協力し合って命を救うことができる仲間としての「救命サポーター」が重要です。それこそ使用率向上の鍵といえます。

そこで日本AED財団は、すでに何かスキルを持っている、救命に関心がある、何か社会のため手を貸してみたいという様々な方々、子供からお年寄りまで誰もが参加して繋がり、仲間も増やしていこうというプロジェクト「team ASUKA」を立ち上げ、アプリも作成して活動の幅を拡げています。

11年前に学校で突然死した明日香ちゃんという少女の名前は、AED普及の合言葉のようになっています。体育活動時等における事故対応テキスト「ASUKAモデル」がその代表ですが、「team ASUKA」にも明日香ちゃんの名前をお借りしました。

救命サポータープロジェクトをどのように推進していくべきかを、参加者の経験談を交えながら提案、議論した結果をまとめた本記録集が、一人でも多くの命を救うための一助となれば幸いです。

CONTENTS

減らせ、突然死　AED 推進フォーラム 2022

あなたも私も救命サポーター：全国に拡がるteam ASUKA

Ⅰ. team ASUKA の原点をふり返る …… 6

モデレーター：松岡　康子　日本放送協会(NHK)名古屋放送局 記者
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

◈ 娘、明日香が遺したメッセージ
桐田　寿子　桐田明日香さんのお母様

◈ 明日香さんからのメッセージ が中学生だった自分を動かした
的塲浩一郎　千葉市消防局 消防士

Ⅱ. 家族皆が救命サポーター：林家のチームワーク …… 10
－救命された父親の一家が救命する側に－

聞　き　手：三田村秀雄　日本AED財団 理事長
西山　知佳　京都大学大学院医学研究科クリティカルケア看護学分野 准教授
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

◈ 胸骨圧迫を始めたのは4年前にAEDに救われた父　林　正隆
◈ AEDを取りに走ったのは妊娠 6ヶ月の母　美弘
◈ その場所がわかるAEDマップを作ったのは小学生の長女　陽月

Ⅲ. 救命サポータープロジェクト team ASUKA の紹介

1. 救命サポーター必携の秘密兵器 救命サポーターアプリ …… 14
島本　大也　京都大学大学院医学研究科 特定助教
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

2. 地域から全国に拡がる救命サポーター …… 15
藤江　聡　東京医科歯科大学病院救命救急センター 助教
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

3. 学校で育って拡がる救命サポーター …… 16
千田いずみ　明治国際医療大学保健医療学部救急救命学科 講師
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

4. スポーツシーンを守る救命サポーター …… 17
本間　洋輔　千葉市立海浜病院救急科 主任医長
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

Ⅲ部の座長は日本AE財団常務理事の武田聡が務めました

パネルディスカッション
Ⅳ. 救命サポーターたちが命を救う社会の実現に向けて ……18

司　　会：石見　　拓　京都大学大学院医学研究科予防医療学分野 教授
日本AED財団 専務理事

堀　　潤　NPO 法人 8bit News 代表 / ジャーナリスト

パネリスト

ママさん救命サポーター
林　　美弘　救命協力体験者

アスリート救命サポーター
有森　裕子　元・プロマラソン選手 / 日本AED財団 AED 大使

学校中が救命サポーター
細田眞由美　さいたま市教育委員会 教育長

地域の救命サポーター
太田　和美　柏市 市長

家庭内の救命サポーター
佐藤　謙一　セコム株式会社営業第四本部 本部長

2022年度 AED功労賞をふり返って ……26

減らせ突然死「AED推進フォーラム2022」は、2022年12月13日（火）に学士会館（東京都千代田区）で開催されました。本冊子はその記録誌になります。

Ⅰ. team ASUKA の原点をふり返る

モデレーター：松岡　康子
日本放送協会(NHK)名古屋放送局 記者
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト実行委員

メインゲスト：桐田　寿子
桐田明日香さんのお母様

的場浩一郎
千葉市消防局 消防士

松岡　桐田明日香さんのことを知ったのは、亡くなられた翌年の2012年です。その出来事をきっかけに、AEDを積極的に使ってもらうためのキャンペーンをメディアとして行ってきました。

今日は、明日香さんのお母様、桐田寿子さんにお越しいただきました。そして、もう一人、的場浩一郎さんをお招きしています。的場さんは中学3年生のときに学校の授業で救命講習を受け、そこで明日香さんのこと、AEDのことを知ったそうです。受講から半年後、マラソン大会で完走直後に倒れているランナーを目の当たりにし、直感的にAEDが必要と感じて、近くのスポーツクラブに取りに行き、一人の命を救っています。今は千葉市消防局で消防士として救命の仕事に携わっています。

私と桐田さんは、的場さんのことを息子のように思っています。今日はあえて的場君と呼ばせていただきます。

桐田さんは、明日香さんが亡くなられてから現在に至るまで、全国各地で講演を行い、AEDの普及活動を続けていらっしゃいます。この10年間、どのような想いで活動をされてきたのでしょうか？

桐田　学校にAEDがあったにもかかわらず、なぜ明日香が倒れたときに使われなかったのか？ ヒューマンエラーの分析手法から生まれたのが「ASUKAモデル（体育活動時等における重大事故を未然に防ぐための取り組みや、重大事故発生時・発生後の対応について具体的に示しているテキスト；2012年作成）」です。「ASUKAモデル」の最大の特徴は、意識や呼吸があるのかないのかわからない場合にも、次の救命ステップに進むことが明記されている点です。

AEDは自動診断機能を備えており、次に行うべきことを音声で教えてくれます。AEDは飾るものではなく使うものであること、安心して使用できる機器であることを、この10年発信し続けてきました。

松岡　的場くんは、倒れているランナーを見て、どうしてすぐにAEDを取りに行こうと考え、実行できたのでしょうか？ 誰かにAEDを取ってきて、と指示をされたのですか？

的場　AEDを取ってきて、という指示があったわけではありません。自分の受け持ちの区間を走り終え、ふと辺りを見回すと、口と目を半開きにして不自然な状態で倒れているランナーが目に入りました。これは学校の授業で学んだ明日香ちゃんの事例と同じではないかと思い、AEDを取りに走りました。

松岡　私はその取材をさせていただきました。AEDを取りに走ったスポーツクラブに人がいなかったため、無断でAEDを持ち出したということでした。まだ中学3年生であった的場君の心に、無断で持ち出すことへの迷いはありませんでしたか？

的場　無断で持ち出してよいのだろうか？ と

いう不安な気持ちはありました。当時は救命の知識を持ち合わせていなかったため、半信半疑の状態でした。心肺停止状態ではないのに持ち出してしまったら、という不安な気持ちになりました。ただ、どのような状況であったとしても、AEDはあったほうがよいだろうと思い直し、余計なことは考えずにAEDを手に懸命に現場に走って戻りました。

松岡　大人であれば、考えすぎてためらってしまい行動に移せなかったかもしれません。子供であったからこそ余計なことを考えずに行動できたのではないかと感じました。いずれにしても、的場君は明日香ちゃんを脳裏に浮かべながら行動を起こした、ということが重要です。桐田さんは、その話を耳にしたときにどのように思いましたか？

桐田　的場君に、「ASUKAモデル」を通して明日香のことを授業で伝えたのは、山口県長門市の田村さんという救命士の方です。私は田村さんから的場君がAEDを運び、救命をしたことを聞きました。明日香のことを知って救命した最初の救命報告で、「ASUKAモデル」による初の救命事例でした。救命された方は、地元で慕われている医師であったということも田村さんから伺いました。

的場君は、その人を救っただけでなく、その人を大切に想う家族や周囲の心、そして地域にお住いの多くの患者さんまでをも救ったのだな、と強く思いました。

松岡　桐田さんは常々、救命行為は救命された本人にとどまらず、周りの人も救うことになります、という話をされています。

現在、的場君は千葉市の消防局で消防士として人命救助の任にあたっておられますが、なぜこの道を選択されたのでしょうか？

的場　私はこの一件を経験して、消防士という仕事を目指すようになりました。明日香ちゃんと同い年ということもあり、授業ではじめてこの話を耳にしたときに、同じ年齢の子供がこうした事例で命を落としたのだ、ということに強いショックを受けました。朝、元気に学校へ行った我が子が、変わり果てた姿で戻ってくるということをご両親は想像できたでしょうか？ 明日香ちゃん本人も無念だと思いますし、残された家族を思うといたたまれない気持ちになります。そうした思いをする人を減らしたい、という気持ちから消防士の仕事を目指しました。

松岡　今、出動の際に想っていることはありますか？

的場　出動する際にはどのような案件であっても自分が助ける、という強い気持ちで臨んでいます。こうした気持ちを芽生えさせてくれた明日香ちゃんに、とても感謝をしています。そうして、今の自分が明日香ちゃんにいつ見られても恥ずかしくない仕事をしていきたいと思っています。

救命講習で講師を務める的場氏

救命を経験したことが消防士を目指すきっかけとなった。現在は多くの人に救命の重要性を伝えている。

フォーラム終了後の一コマ

左から松岡氏、的場氏、桐田氏。明日香ちゃんを通して世代を超えて繋がった。team ASUKA のメンバーとして、それぞれがそれぞれの立場で救える命を救う活動を行っている。

桐田　今、私はとても嬉しい気持ちでいっぱいです。明日香は的場君と同じ1999年に生まれています。私が初めて的場君に出会ったのは、的場君が高校3年生のときです。それ以降、交流を続けています。的場君は明日香の弟たちをとても可愛がってくれます。明日香の弟たちも、的場君を本当のお兄さんのように慕っています。一緒にすごろくをしている姿を目にしたときは、何ともいえない幸せな気持ちで満たされました。

長男の真君は的場君と出会い、交流を深めていくなかで、自分も命を救う仕事に就きたい、という気持ちを強く持つようになりました。的場君は、「PUSH 認定インストラクター（胸骨圧迫とAED の使い方教える講師）」として市民向けに講習を行っています。高校1年生になった真君もこの資格を今年の9月に取得し、早速11月から講師を務めるなど、AED の普及活動を行うようになりました。

救命への想いが次世代に繋がっていく、そうした事実が私は何よりも嬉しいです。様々な形で明日香にかかわった多くの方々が、この10年、明日香のメッセージを心に持ち続けて活動していることを何よりも尊いと感じています。こうした活動に対する感謝の気持ちを、明日香の好きな言葉「ありがとう」でお伝えします。「ありがとう松岡さん、ありがとう的場君。本当にありがとう」。明日香はみんなの心の中で生き続けていると、私は感じています。

松岡　「ASUKA モデル」が作成されてから10年です。呼吸の状態などがわからないときでもAEDを使う、迷わずAEDを使う、ということが徐々に浸透してきました。それでも、救急車が到着するまでにAED が使われているケースはまだ5%未満にとどまっています。これからもっとAEDを使っていただくために、「team ASUKA」の役割はますます大きくなります。

桐田　私はシルクロードが好きで、明日香の名前を、シルクロードの東の出発地点とされる奈良県明日香村からいただきました。生まれ

る前から、男の子だったら「飛鳥」、女の子だったら「明日香」と決めていました。その名前の由来のとおり、人と人をつなげるのがあすかだと思います。知識は心が動いたときに活かされます。救命への想いをつなぎ救える命を救うため、「team ASUKA」を全国に普及していきたいと、心から、そう願っています。

的塲　初めて救命講習を受けたときに、まさか自分がAEDの必要な状況に遭遇するとは思っていませんでした。また、遭遇した際にも、自分がAEDを取りに行ってもいいのだろうか、という不安な気持ちにおそわれました。ですが、何もしなければ倒れた方は亡くなってしまいます。「大丈夫ですか？」という言葉をかける勇気を持つことがとても重要だと思います。

「team ASUKA」を通して、一人でもそうした勇気を持つ方が増えることを願っています。今後も救命の重要さを伝えてまいります。

松岡　私も「team ASUKA」のメンバーとして、救える命を救うために人の心を動かせるような普及活動を今後も継続して行ってまいります。

Ⅱ．家族皆が救命サポーター：林家のチームワーク

― 救命された父親の一家が救命する側に ―

聞き手：三田村秀雄
日本AED財団 理事長
西山　知佳
京都大学大学院医学研究科クリティカルケア看護学分野 准教授
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

体験当事者：林　正隆
美弘
陽月

三田村　人を助けたことのない人が、初めて人を助ける。その瞬間はどのような気持ちなのでしょう？ 突然目の前で人が倒れたら、誰しも頭の中が真っ白になるでしょう。それはやむを得ないとして、重要なのはその後にどのような行動をとったかです。

本日は、ご自宅で心停止した方の命を救うために、ご家族がそれぞれの役割を見事に果たした林家の皆様にお越しいただいています。お父様の林正隆様、お母様の美弘様、そして小学校4年生の陽月ちゃんです。

西山　会場の皆様には2022年11月版のニューズレターをお配りしておりますが、そのなかに林さんご一家の活躍が掲載されています。テレビでもその内容の再現映像が放映されたことがありますので、ご存じの方もいらっしゃるのではないでしょうか？ 私もテレビで陽月ちゃんが自由研究として作成したAEDマップを拝見したときに、このようなものを作る子供がいるのかと大変驚きました。

さて、林家で起こった心停止例について、まずはお父様の正隆さんにお伺いします。

林正隆　6月のある日の夕方、自宅でリフォーム業者の方と打ち合わせをしていました。すると突然、彼が「うっ」「やばい」とうめき、近くにある脚立にしがみつき、体を回転させながらどさっと倒れ込みました。その日は暑かったので、とっさに熱中症かもしれないと思いました。最初は痙攣しているようで、すぐに固まってひきつけのようになったので、てんかんかもしれないと思い直しました。でもそのまま動かないので、これは放置してはいけないと、まず脈をとりました。脈がないと感じたので、胸骨圧迫を行おうと恐る恐る胸を押してみましたが、不安になって妻を呼びました。妻は飛ぶような速さでやってきたかと思うと、私を突き飛ばし、その方の上に馬乗りになって胸骨圧迫を始めました。

西山　正隆さんはご自身が以前、心停止を起こし救命されたことがあります。今回は救命する側に立たれたという貴重な経験をされています。どのようなことを意識してこの救命処置をされたのでしょうか？

林正隆　私は4年前、マラソンのゴール直後に倒れ、AEDで助けていただいた経験があります。そのときに、救命活動は時間が勝負だということを学んでいました。今回もとにかく急ごうと考えました。救命講習会での「救命時には慌てず落ち着いて」という言葉を思い出し、まずは落ち着くように自分に言い聞かせました。

講習会で見た明日香さんのビデオで、死戦

Ⅱ部の様子

左から西山氏、林正隆氏、陽月さん、美弘氏、三田村氏。陽月さんが身振りを交えてマップ作成のいきさつ、作成するうえで注意した点などを話すと、参加者から感嘆の声があがった。

期呼吸という言葉と、それがどのような呼吸かを知っていました。倒れた方の呼吸を聞いて、死戦期呼吸をしていることがわかりました。私が心停止になったときに助けてくださった医師から、「救命の講習会では人工呼吸がとりあげられますが、一般の方には敷居が高い。倒れた人を見たら、ひたすら胸を押してください」と聞いていたため、妻と交代したあと懸命に圧迫しました。心臓が正常な状態に戻ったかな、と勝手に思った瞬間もありましたが、明日香ちゃんのビデオで絶え間なく圧迫する必要があると学んでいたため、さらに力を入れて圧迫しました。

西山　「ASUKAモデル」が活きたということです。

三田村　突然目の前の人が倒れたときに、いきなりその人の心臓が止まっているとはなかなか思いません。正隆さんがおっしゃったように、何かおかしな呼吸をしている、痙攣も起こしている、寝たまま「気をつけ」のような直立不動の姿勢になっている……そのような状態だと「心停止ではない」という考えに陥りやすいと思います。それでも怯まずに胸骨圧迫をしたのは、さすがだと思いました。

美弘さんは、馬乗りになってでも胸骨圧迫を行うべき、となぜ思われたのでしょうか？

林美弘　とにかく、人を死なせてはいけないと強く思いました。その日はとても暑い日だったので、私も最初は熱中症を疑いましたが、いびきのような呼吸をしていることに気付きました。講習会でいびきのような呼吸は危険と学んでいましたし、その方の顔色がみるみる土気色に変わり、いまにも目が飛び出てきそうな形相になって尋常ではないと感じました。胸骨圧迫は必要のない人に行うとなにかしらの反応がある、必要かどうかわからなければ圧迫する、という知識も頭に入っていました。救命処置は時間が勝負ということを何度も聞いて知っていましたので、気付いたときには、体が勝手に動いて主人を突き飛ばし、その方に馬乗りになっていました。

西山　ご主人を突き飛ばしてでも胸骨圧迫を行わなければいけないと思ったのは、以前、ご主人が心停止になられた時に「心臓の拍動が戻るのが遅かった場合には後遺症が残るかもしれない」と医師にいわれたことも影響していますか？

林美弘　もちろん夫の命が助かったことには、とても感謝しています。その一方で、当時は2人

目の子供がお腹の中にいたので、子供2人を残して父親の意識が戻らなかったり、半身不随になったりしたら……という恐怖がありました。そのときに、心拍が戻るまでの時間と後遺症の有無が深く関係しているということをインターネットなどで調べました。一秒でも早く、という気持ちはそうしたことがきっかけになっています。

西山　小学校や保育園の勤務というお二人の仕事柄、以前から救命の講習会を受けておられたと伺っていますが、それはどの程度役に立ちましたか？

林美弘　以前は漠然と受講しており、どこか他人事で自分事として考えていませんでした。ところが、主人が倒れた直後に受けた講習会では、内容がすっと頭の中に入ってきました。他人事ではなく、自分事と意識して受講することが大事だと身を持って知りました。

西山　救命を、いかに自分事として捉えることができるか、というわけですね。

　デパートや駅などの公共施設であれば、AEDを思い浮かべないわけではありませんが、自宅で起こった急変に対してAEDがすぐに思い浮かんだことに驚かされました。陽月ちゃんの作成したAEDマップが活かされた瞬間と思います。リフォーム業者の方が倒れられたとき、AEDマップをすぐに思い浮かべましたか？

林美弘　すぐに思い浮かべました。AEDを取りに行く際は頭の中が混乱していましたが、AEDマップだけは目の前にあるような感じがしていました。

三田村　一生懸命、胸骨圧迫がなされているなかで、家の外に出てAEDを取りに行くという行動力には圧倒されました。そのとき、救命可能な時間、いわばその方を助けられる見込みというのは考えていましたか？

林美弘　助けられる見込みというのは一切考えていませんでした。とにかく急いでAEDを取りに行こうという強い気持ちで行動を起こしました。

三田村　美弘さんはその時、妊娠六か月であったということです。その状態で走り、なおかつ裸足だったと伺いましたが……。

林美弘　最初は履物を履いていましたが、身重のため「転んではいけない、裸足の方が走りやすい」と考えて、途中で脱いで履物を片手に持ってAEDを取りに走りました。

西山　近くにAEDがある、ということにつながった陽月ちゃんのAEDマップを見てみましょう。

三田村　美弘さんはAEDの場所をこのマップで把握していたので、スムーズに取りに行けたそうです。陽月ちゃんが幼稚園年長の時に正隆さんが心停止になり、AEDで救命されました。このマップはその次の年、陽月ちゃんが小学校一年生の時の自由研究で作ったそうです。

西山　陽月ちゃん、このマップを見ると何がわかるのでしょうか？

林陽月　家からAEDまでの距離や場所がわかります。見てすぐにわかるように、AEDが置いてある施設ごとにまとめて写真も載せています。

西山　銀行、交番、駅ビルといったようにまとめているのですね。視覚的にもわかりやすいように大変工夫されたマップです。

陽月さんの作成したAEDマップ

施設ごとにまとめて写真付きで掲載されているため、記憶に残りやすい。

三田村　町の中のAEDは陽月ちゃんが考えていたのとどこか違っていましたか？

林陽月　AEDはもっと大きな機械で、置かれている数も少ないと思っていました。調べていくと、思っていたよりも小さくて、置かれている数が多いとわかりました。

西山　陽月ちゃんの作成したAEDマップを見て、我々も負けていられない！という気持ちになっています。team ASUKAをさらに強化し、緊急時に救命サポーターがAEDマップを見てAEDを届ける。そうした流れができるように全力をつくそう、と私たちも盛り上がっています。

三田村　心停止になって救命された方が、今度は心停止になった方を救ったという事例は、われわれの知る限り、正隆さんが初めてです。いわば、AEDは二つの命を救ったことになります。

一秒を争うなかで、何とか救おうという気持ちが第一に存在し、その気持ちを実現させるためには救命の知識と、AEDの場所を把握しておく必要があります。AEDの場所を知らなければ、動こうにも動けません。林さんご一家は、救命サポーターのお手本のようなご家族です。我々も今のお話しを広く共有させていただき、見習って努力を続けて参ります。ありがとうございました。

1．救命サポーター必携の秘密兵器 救命サポーターアプリ

島本 大也
京都大学大学院医学研究科 特定助教
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

目の前で突然生身の人間が倒れる。その瞬間に迅速な対応ができなければ、倒れた方を救命することはかないません。周囲の目もある中、その勇気を持った一歩を多くの人が踏み出せるような環境を構築する必要があります。

救命サポーターとは、救命行動を起こす意思を持ったすべての人です。ここでいう救命行動とは、単純に心停止が発生したときの行動にとどまらず、救命に関わるあらゆる行動を指します。具体的には、AEDの設置情報の集約に協力する行動や、心停止予防に関するニュースの拡散、救命講習の受講といった行動です。救命サポーターアプリは、そうした救命行動を起こす意思を持った皆さんが、お互いの活動を共有しながら繋がることでチームとなり、救命行動が当たり前な世の中になることを目指して作られています。

救命サポーターアプリの中心的な機能は、AEDの設置情報を集約する「AED N@VI」です。AEDの設置情報を集約することで、AEDが活用されやすい環境作りが可能になります。AEDの設置情報を投稿すると、その活動がポイント(Pt)として可視化されます。Ptランキングに参加したり、Ptを使ってクイズに挑戦したり、キャラクターを引けるガチャを取得することができるなど、ゲーミフィケーションを用いて楽しみながら参加できます。その他救命処置を学べる機能やAEDに関する最新情報に触れる機能など、様々なコンテンツがありますので是非救命サポーターアプリを触ってみてください。

救命サポーターアプリは、まだ発展途上です。今後はサポーター同士のコミュニケーションを促進する機能や、サポーター全員で課題にチャレンジする機能の追加も検討するほか、AED登録イベントなどの実施も予定しています。アプリをダウンロードして、救命サポータープロジェクト「team ASUKA」に積極的に参加いただければ、と思います。

2．地域から全国に拡がる救命サポーター

藤江 聡
東京医科歯科大学病院救命救急センター 助教
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

2022年9月30日のASUKAモデル誕生10年の節目に、救命サポータープロジェクト「team ASUKA」が立ち上がりました。日本AED財団がこれまで取り組んできた、スポーツ、教育、ソーシャルでの活動をまとめたうえで、全年代が救命活動に興味を持ち、次世代まで救命の輪が繋がり・広がることを目的としたプロジェクトです。

救命サポータープロジェクトの一環として、地域コア団体の設立を目指します。AED財団をハブに地域から全国へ、地域から地域へも繋げていきます。

この活動では、地域において救命活動を継続する団体と連携し、地域での救命活動をサポートし、支援団体と地域での心肺蘇生講習受講を促進していきます。また、地域コア団体とAED財団との共催で、救命サポーターアプリのダウンロード支援、「AED N@VI」登録キャンペーンなどの広報イベントを行うことで、より強固に救命の輪を繋げて広げていく予定です。AED利用率の向上、救命率の向上に向けて地域から全国への発信をサポートしていきます。

桐田明日香さんの思いの種が育ち、タンポポの綿毛のように全国に飛んでいき、まさかの時にみなさんの心の勇気を奮い立たせ、救命活動に繋がることを願います。

3．学校で育って拡がる救命サポーター

千田 いずみ
明治国際医療大学保健医療学部救急救命学科 講師
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

AED救命サポーターアプリが開発され、さまざまなライフステージにおいて救命につながる仕掛け作りが可能になりました。しかしながら、小中高等学校における救命教育の基盤はこれまで通りであるため、現代のニーズに応じた教育環境の一層の充実が課題です。

海外ではBLS（Basic Life Support：一次救命処置）講習が高校を卒業する要件や義務教育になっている一方、我が国では全児童生徒を対象に実習を行っている学校は高校で27.2％、中学校で27.4％、小学校で4.1％（平成30年度実績）と非常に低い状態です。従来の中学校学習指導要領および高等学校学習指導要領には、「実習」という言葉が入りつつも、基本的には「理解」を求める内容になっていました。2017年に改定・公示された新学習指導要領では、これまでの「理解する」から「身に付ける」に変更されるなど、BLSに関する内容が大きく強化されました。これにより、少なくとも中学校以上では、今後BLSの実習を含めた救命教育がすべての学校で展開されるはずです。

この環境の変化に応じてSchool部会では、学校教材カタログに掲載する学校向けの教材（胸骨圧迫・AED訓練キッドや指導案、DVD）を開発しました。さらに、無関心層の取り込みを目的に、『うんこドリル』とコラボレーションし、2つのコンテンツ（クイズ形式のWebアプリや謎解き動画）をリリースする予定です。加えて、ICT（Information and Communication Technology：通信技術）教材作成に向けた取り組みも開始しつつあり、後々は救命サポーターアプリのコンテンツとすることを検討しています。

4．スポーツシーンを守る救命サポーター

本間 洋輔
千葉市立海浜病院救急科 主任医長
日本AED財団 減らせ突然死プロジェクト 実行委員

2022年11月～12月にワールドカップカタール大会が開催され、日本代表チームの活躍に日本中が沸き返りました。そうした中、デンマーク代表のクリスティアン・エリクセン選手が、試合中に突然の心停止で倒れるという事故が発生しました。エリクセン選手は、AEDによって救命され、引き続き大会に参加したということです。

スポーツ中は心停止のリスクがあがることが報告されているため、その問題に対し、日本AED財団では様々な活動を行ってきました。しかしながら、スポーツ現場にいるのはプレーヤーだけではありません。観客をはじめとする周囲の人が突然の心停止になることがあります。そこで日本AED財団では、観客席における突然死をゼロにするため、昨年度から観客席にAEDを迅速に届けるシステム「RED SEAT」の実装を進めてきました。2022年度は、ラグビーリーグワンに所属する4チームで実装していただき、実際に活動いたしました。その4チームの中で、千葉県柏市をホストタウンのひとつとしている「NECグリーンロケッツ東葛」は、RED SEAT実装のための救命ボランティアの育成のほか、試合会場でAEDに関する啓発イベントを実施しました。柏市はAEDかけつけアプリ「AED GO」（スマートフォンに無料のアプリをダウンロードしたボランティアの方に、救命手当が必要な人の場所とAEDの設置場所、および経路を通知する）を導入するなどAEDに関する実績を有しています。啓発イベントでは、日本AED財団のほか地域の救命教育団体や消防と連携し、救命講習および「AED GO」のサポーター登録を呼びかけるなどいたしました。

救命サポータープロジェクト「team ASUKA」が、観客席を守る活動「RED SEAT」と地域を守る活動「AED GO」を繋ぐことで、スポーツを通した救命サポーターの育成、いのちを守る安心安全なまちづくりを推進していきたいと思っています。

Ⅳ. 救命サポーターたちが命を救う社会の実現に向けて

司　会　石見　拓（京都大学大学院医学研究科予防医療学分野 教授 / 日本AED財団 専務理事）
堀　潤（NPO 法人 8bit News 代表 / ジャーナリスト）

パネリスト　林　美弘（ママさん救命サポーター：救命協力体験者）
有森　裕子（アスリート救命サポーター：元・プロマラソン選手 / 日本AED財団 AED大使）
細田 眞由美（学校中が救命サポーター：さいたま市教育委員会 教育長）
太田　和美（地域の救命サポーター：柏市 市長）
佐藤　謙一（家庭内の救命サポーター：セコム株式会社営業第四本部 本部長）

パネルディスカッションの様子

左から堀氏、林氏、有森氏、細田氏、太田氏、佐藤氏、石見氏。マスク着用、距離をとるなど新型コロナウイルス感染拡大に気をつけながら、熱のこもった討議が行われた。

堀　パネルディスカッションは、堀潤と日本AED財団専務理事の石見拓先生が司会進行をさせていただきます。

堀　DX(デジタルトランスフォーメーション)化が進み、AED普及の取り組みも次のフェーズに移行しつつあるように感じます。石見先生、いかがでしょうか?

石見　DX化のみならず、世代交代も進んできました。我々の取り組みの強みの一つは、若い方々の力で活動できていることです。

堀　若い力を活かして、社会に実装、浸透させていくためにどうすべきかを議論することが、今回のパネルディスカッションの目的です。本日は、すでに様々な取り組みの場で活躍をされている皆さんに集まっていただきました。

まずご紹介するのは、2部の「家族皆が救命サポーター:林家のチームワーク」で素晴らしいお話をしていただきました林美弘さんです。ママさん救命サポーターという役割で参加いただきます。

堀　これまでを振り返ってどのように感じておられますか?

林　様々な方のお話を聞かせていただき、AEDの必要性を改めて実感しているところです。

堀　林さんのお話を伺い、知識の重要性について今一度考えさせられました。続いて、アスリート救命サポーターの有森裕子さんです。

有森　AEDについて、年々知識の不足している方や無関心である方が減ってきていることが実感できるようになり、AED普及の取り組みに手ごたえを感じています。

堀　続いて、学校中が救命サポーターのさいたま市教育委員会教育長の細田眞由美さんです。

さいたま市での取り組み、メッセンジャーとしての全国への広がりについて、どのようにお考えでしょうか?

細田　明日香ちゃんという大変貴重な一人の少女の命が失われてしまいましたが、明日香ちゃんは私たちに体育活動時における事故対応テキスト「ASUKAモデル」を残してくれました。さいたま市の子供たち、教職員の誰もが「ASUKAモデル」を使って学校中が救命サポーターになる、そうした意気込みで普及活動に取り組んでいます。

堀　「AED GO」をはじめ、AEDの普及に先進的に取り組んでいる柏市からは、市長の太田和美さんをお招きしています。

太田　柏市は千葉県の北西部に位置する人口43万人の中核市ですが、本市では24時間利用できる「コンビニAED」をはじめ、スマートフォンのアプリケーションを利用した救命サポートシステムを積極的に活用しています。

堀　太田さんは元衆議院議員です。国から、また地域の首長として地域を作るという両方に関係した経験をお持ちです。市民活動に触れてどのようなことを感じますか?

太田　市民の方々との活動を通して、一人の命も取りこぼさない、取り残さないようにしていかなければならないという責任感をよりいっそう持つようになりました。

パネルディスカッションの様子

マラソン大会以外のスポーツ現場で啓発する必要があると話す有森氏。

堀　最後は、家庭内の救命サポーターとしてAEDを販売しているセコム株式会社の佐藤謙一さんです。

佐藤　セキュリティ会社が、なぜAEDを？と疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、究極のセキュリティは人の生命を守ること、と考えるとご理解いただけるのではないでしょうか？ 当初からレンタル事業を中心に展開し、18年もの歳月が流れました。

事業を開始した2004年当時は、「AEDとは何ですか？」 と質問を受けることも珍しくありませんでした。18年でここまでAEDの認知度が上がったのか、と感慨深い気持ちになっています。さらに5年10年を経ると、より認知度が高まりもっと多くの人を助けられるのではないかと期待しています。

堀　それぞれの立場から具体的にどのような活動をされているのかを伺い、課題が浮き彫りになったところで、課題克服に向けた知恵を出しあっていきたいと思います。

スポーツ現場におけるAED普及の取り組みは、どのようになってきましたか？

有森　AEDの普及に限定しますが、スポーツの中ではマラソンが頭一つ抜けているかもしれません。ただこれには、マラソン大会で倒れる人が多かったという事実があります。死者が出ることも珍しくはなく、報道されないために知らない方も多いようです。そのため、どの現場にいっても医療チームがあり、スタート地点には自転車に乗ったAEDサポーターがスタンバイし（待機し）、スタートと同時にコースを行ったり来たりしながら、絶対に見逃さな

いという気持ちで取り組んでいます。マラソン大会では規模にかかわらず、10kmでもハーフマラソンでもAEDは必ず準備されています。それも1台2台ではなく、数十台です。

一方で、1~5万人規模のスタジアムでも、施設によってはAEDが1台しか設置されていないこともあり、驚かされます。マラソン大会以外のスポーツ現場に足を運び啓発する必要性を感じています。

石見　マラソン大会は一番の成功モデルです。しっかりと検証し、このモデルを他の競技にどのようにして広げていくかを考えなければなりません。

太田　マラソン大会でAEDを準備しておくのは、主催者側として常識になってきました。マラソン大会にとどまらず、様々な競技に活用してもらうことが課題ですが、例えばジャパンラグビー リーグワンに属するNECグリーンロケッツは、ホームである千葉県立柏の葉公園総合競技場でゲームを行う際、「RED SEAT」という新たな試みを始めました。

石見　「RED SEAT」について、少し補足させてください。「RED SEAT」は、スタジアムで人が倒れたときに、AEDをもってその場所にいち早く駆けつけるRED SEATERを事前にスタジアムに配置しておくという、日本AED財団が進めている取り組みです。試合の始まる前にAEDをどこに置くか、何台必要かを決定するところから始めますが、ここにはマラソン大会のノウハウが活かされています。競技場にAEDを置くという発想ではなく、イベントの内容にあわせて、必要な場所に必要な台数を置き、それを動かすという発想です。

堀　なぜ、マラソン大会では常識になったのかを、今一度考えてみたいと思います。マラソン大会で倒れる人が多かったというお話しでしたが、果たしてそれだけでしょうか?

石見　マラソンというスポーツは、自分事になりやすいのでしょう。市民参加型のマラソンでは、4万人走ると1人は心停止になるといわれています。東京マラソンですと、1回開催すると1人が心停止になるという計算です。誰にでも起こりうる、かなり身近な出来事といえます。

堀　第2部でも自分事という言葉がキーワードでした。林さんいかがでしょうか?

林　主人が倒れたのもマラソンのゴール直後でした。それまで、特に心臓の疾患を指摘されていたわけではありません。一般市民が普通にイベントに参加して、その直後に倒れたということになります。体調が悪かったわけでもなく、少しばかり暑かったような気がする、という程度です。皆さんも少し暑いと感じたぐらいであれば走ると思います。

結局のところ、倒れてしまうという状況をいかに自分事として捉えられるかが重要といえます。私も主人が倒れていなければ、自分事として考えることはなかったと思います。いつ誰に起こるかわからないことを、自分事として意識しておく必要があります。

個人的な実感になりますが、AEDは普及してきています。以前であれば、AEDは知っているけれど設置場所がわからない、使い方がわからないという声が多かったように思われます。メディアに取り上げられたことなども影響しているのでしょうが、ママさん友達から、歩いて探してみたよ、という声を聞くようになってきました。AEDがどこにあるのかを皆が探

すようになること、AEDを使えば人を救えるかもしれないということ、をより多くの方々に知っていただく活動を続けていくことが大切です。

佐藤　少し話を戻しますが、使っていただくためにはアクセスしやすいところに置かなければなりません。駅、空港といった公共施設には一定数が設置されていますが、生活圏では必要な台数が設置されていません。マップを確認すると一目瞭然です。この空白地帯を埋めていく作業は、メーカー、販売会社の義務と認識しています。

林　マンションはオートロックされている中に設置されていることが多いため、マップ上では確認できてもすぐに取りに行ける状況にはありません。そうした意味では、柏市の取り組んでいる「コンビニAED」は有効です。

堀　ホテルも同様ですね。設置してあることはわかっていても、夜だと取りに入ることができず、結局使用できない。

有森　コンビニは、多くの方が日常的に使っているために、取りに入るための抵抗感がないのも良いです。

堀　そのとおりです。

細田さんにお伺いします。学校現場でこれまでどのような取り組みを行ってきましたか？今後一層普及させるためには何が必要と思われますか？

細田　さいたま市は大きな自治体です。学校は168校存在し、教職員が約6,000人、児童生徒が10万5,000人です。普及させるためには、学校教育の中でできるだけ多くのサポーターを育てていくことが最善の方法です。まず教職員に対してですが、毎年年度当初に「ASUKAモデル」を活用した傷病者発生時の対応訓練を行っています。教職員がそれぞれの役割を演じ、終了後に皆でブリーフィングします。さらに、さいたま市の消防局とコラボして、普通救命講習、その上の応急手当普及員の講習なども行い、受講するようにしています。すでにさいたま市には、924人の応急手当普及員の資格を持つ教職員が存在しています。各学校に1～2人は配置されている計算になります。

次に子供に対してです。小学校5～6年生、中学校1年生そして高等学校と非常に系統立てた救命教育を行っています。教育課程の中に位置づけられていて、中学校1年生の段階で普通救命講習1の修了書を受けとるようになっています。そのため、毎年さいたま市では、1万1,000人程度の普通救命講習1を取得した子供たちが輩出される計算になります。

堀　救急救命、AED、心臓マッサージが、子供たちの中の共通言語として存在しているということになります。非常に先進的な取り組みといえます。

細田　今年の9月30日に、「ASUKAモデル」誕生10周年記念フォーラムをさいたま市で行いました。その際、市立学校の生徒による主体的な救命活動の取り組みを小学校、中学校、高等学校にわけて順番に発表してもらいました。小学校の部では、林陽月さんに協力していただき、自分の学区にAEDがどのくらいあるかというマップ作りをしました。中学校の部では、大谷場中学校の発表が圧巻でした。あなたの目の前で誰かが倒れたら救

急救命できますか？ というアンケートを仲間内でとったところ、自信をもって救命できると答えたのは2割であったことから、生徒会が立ち上がり、保健委員会という委員会の枠を超えてオール中学校で「大谷場中レスキューサポートチーム」を作ったそうです。先生や医療従事者が来る前、その時間を自分たちで繋ごうという役割をもつレスキューサポートチームで、それを発表してくれました。高校生の部では、私たち若い世代が行うべきこと、が発表されました。日常的に、「万が一、自分の目の前で誰かが倒れたら、私たちが必ず助ける」という気持ちが育っています。

堀　2016年に起きた熊本地震の際に、小学校で取材をいたしました。もの凄く迅速に避難所運営を進めているのを目の当たりにしました。10代から年配の方々まで一つのチームに見受けられたので、どうしてこのようなことが可能であるのかを聞いてみました。すると、普段から不測の事態を想定してチーム作りを行っている、と答えたのです。日ごろからどういった意識をもち、準備をしているのか、その重要性を垣間見ました。AEDによる救命救急も同様ということですね？

細田　その通りです。「ASUKAモデル」を誕生させた地域であるさいたま市の使命です。何とか明日香ちゃんの思いを繋げていきたい、さいたま市はそうした自治体でなければなりません。

太田　先ほど「コンビニAED」の話しがありました。本市には24時間営業のコンビニが155ヶ所あり、約8割の126ヶ所にAEDを置いています。しかし、ただやみくもにAEDの設置数を増やしても使用率は上がりませんでした。それを使ってくれる人を育てることが重要で、さいたま市の取り組みには見習うべきところが多くあります。

堀　当事者として意識を持ってもらうのは生半可なことではないと思います。多くの子供たち、日々の業務で忙しい先生方にこうした取り組みに参加し、発展させることができた要因お伺いさせてください。

細田　「ASUKAモデル」の存在です。「ASUKAモデル」が我々をしっかりと支えてくれたのです。

　つい最近の出来事です。出勤途上のさいたま市の小学校教員が、路肩で縁石に乗り上げている車を見て、「あっ」と思い視線を運転手に移したら、倒れているのが目に入ったそうです。まず頭に浮かんだのは、「どこにAEDがあるか？」で、すぐ近くにさいたま市立教育研究所があるのを確認し、そこまで走って研究所の職員と一緒にAEDを手に戻り、救急救命を行ったそうです。「ASUKAモデル」で何度も研修を受けていたため体が自然に動いた、ということでした。10年継続してきた取り組みの成果の一つと思います。

堀　他の自治体からの視察、問い合わせが多く寄せられていると思います。実践できる自治体と実践できない自治体の差は何でしょうか？

細田　難しい質問です。どこの自治体もでもやる気をお持ちでしょう。では何が違うのか？

有森　実践できる、実践できない、の差はイメージを持ったやる気といえませんか？ イメージをもって自分事とすることです。普及させる我々の側にも課題がありそうです。コンビニ

パネルディスカッションの様子

目撃された心停止に対する使用率が5％にとどまっているため、いかにして使用率を向上させていくかが課題、と話す太田氏。

百何十ヶ所に置いてもそれだけでは稼働しなかったという話がありました。コンビニに設置してありますよ、というメッセージだけではなく、コンビニ設置のAEDを使用したときのイメージまで伝えることが必要ではないかと思いました。

林　イメージは重要です。自分事として捉えることができるようになったのは、主人が倒れたという大きな事故があったためで、それまではイメージできませんでした。経験がない人にどのようにイメージさせられるか。

経験は、講習である程度獲得できます。講習を何度も受けた経験がイメージを膨らませ、自分を動かすことに繋がるのではないかと思います。

太田　柏市では470ヶ所にAEDが設置されていますが、目撃された心停止に対して使用率は5%に過ぎませんでした。使用率の向上が次の課題になります。そこで、「AED GO」というアプリケーションを用いて、市民の皆さんに救命ボランティアに登録いただくようにしています。救急車より、救急隊より早く駆けつけていただこうというイメージを持たせた取り組みです。

現在、2,000名を超える市民に登録していただいていますが、実際アプリケーションが作動した件数が260件近く、それによって駆けつけた件数は80件を超えたということです。まだ直接的な救命には至っていませんが、救急隊より早く駆けつけられるということが実証されました。

堀　制度を動かすときに、具体的なイメージを伝えられるというのは大きいと思います。

有森さん。ほかに普及のカギになりそうな方法はあるでしょうか?

有森　日本代表のサッカー選手のような顔の知られているアスリートに協力を仰ぐとよいのではないでしょうか? スポーツが社会になしえる意義の中にこうした役割を含めていくのです。

命を輝かせる、生命を強靭なものにしていく、スポーツはこうしたことに共生しているはずです。これまでアスリートが救命救急に深くかかわってこなかったことは、本来不自然であったといえます。

石見　アスリートにとどまらず、発信力のある方々を巻き込んでいただくというのは素晴らしいアイデアです。是非、協力の輪を作っていただきたいと思います。

堀　佐藤さん。AED販売会社としての今後の取り組みについてはどうでしょうか?

佐藤　取り組んでいるチャレンジを二つご紹介します。一つ目のチャレンジは家庭向けのAEDです。心臓突然死の約7割は家庭で起きています。この課題を克服しようと4年前に商品化いたしました。このAEDには、デバイスの管理をオンラインで行える、疾患を持っている方の既往歴やかかりつけ医の情報を事前に預かり、健康相談やいざ倒れた時に救急隊にその情報を渡して搬送先の検討に役立てていただく、という特長があります。もう一つのチャレンジは、心肺蘇生の体験ができるキットの普及です。少しずつ広がり、奥様がご主人を、お母様がお子様を助けたという事例が寄せられるようになっています。

堀　林さん。今の話はどのように受け止められましたか?

林　母が高齢で一人暮らしのため心配しています。健康相談もできるAEDであれば、「お母さんこれ持っていてね。置いておいてね」ということにつながりますので、素晴らしい付加価値です。

佐藤　すでに疾患をお持ちの方から導入されるためまだまだこれからですが、普及に際してどういった課題があるか確認しながら進めています。

堀　AEDを、機器としてのAEDとして終わらせないことが普及のカギといえそうです。

佐藤　セコムではホームセキュリティを提供しています。センサーを設置することで、その前を通る回数などをもとに、活動量を比較します。体力が落ちてきているようだから注意をしないと、というような気づきが生まれます。

また、ホームセキュリティのオプションで提供するマイドクターウォッチでは、実際倒れた場合に、加速度計センサーを使って転倒検知します。我々のセンターに自動で通知されるシステムで、何があったかを確認できます。近くにAEDがあれば、救命行動に移ることもできます。

健康に関心のある方には、Apple Watchのようなデバイスで健康情報の維持管理ができるサービスを目指しています。心臓突然死の予兆がわかれば対応できるかもしれませんから、そうした変化を見ようというチャレンジです。

堀　パネルディスカッションはこれで終了です。本日はありがとうございました。

2022年度 AED功労賞をふり返って

世の中には独自にAEDの普及啓発に努力されている方が数多くいらっしゃいます。そういった方々の努力を教えていただくことで、反省させられ、目を覚まされ、励まされることがしばしばあります。毎年のAED功労賞への応募は財団にとっても、また国民全体にとっても貴重なものと考えています。2022年度は14件の応募があり、それらを5名の審査員に厳正に審査していただいた結果、1組の最優秀賞と2組の優秀賞が決まりました。

最優秀賞には、福井県内の小中学校で2010年からの13年間にわたり計223校に心肺蘇生法授業を展開してきた「特定非営利活動法人命のバトン」が選ばれました。この活動によって延べ1万6,000人あまりの児童・生徒が学んで育ち、一部はすでに成人になっています。「命のバトン」を立ち上げ、この仕組みを主導してこられたのは、高校のリレー競技でバトンを渡した直後の心停止で16歳の娘を亡くした母親の川崎真弓さんで、その長年の努力が評価されました。

1組目の優秀賞には、「福岡市消防局・福岡市教育委員会」が選ばれました。福岡市では消防局が教育委員会と連携して進めてきた小中学生への救命講習が注目されました。当初は消防職員が主体となって生徒への指導にあたっていましたが、途中から教職員への指導を始めました。受講した1,400人近くの教職員が今度は生徒に指導するという玉突き方式を進めた結果、述べ11万人を越える児童生徒に救命法を伝授することができました。実際に救命を成し遂げた教師が出てきたことも評価されて優秀賞受賞につながりました。

2組目の優秀賞には、「林 陽月さん、美弘さん、正隆さん」が選ばれました。街中での救命では、協力者の存在に加え、AEDへのアクセスが重要です。AEDを探している間につい時間が過ぎてしまいます。そこで注目されるのがAEDマップです。優秀賞を受賞した林家のケースでは、訪問者の心停止に対し家族全員が協力して救命を成功させたのですが、その鍵となったのが小学生の陽月さんが自由研究で作ったAEDマップでした。心停止に直面した際、直近のAED設置場所を瞬時に思い出し、取りに走り救命に繋げることができました。

このようなAEDマップを多くの市民が共有できるように、との思いでつい最近、日本AED財団では救命サポーターアプリを公開しました。これをさらに進化させて、離れた場所からでもSNSと有志の協力を活用して、AEDを素早く現場に届けられるシステムの構築にチャレンジしています。「あなたも私も救命サポーター」と呼べる社会、助かる命を助けられるカルチャー創りを日本AED財団は目指して参りますので、引き続きご支援をよろしくお願い致します。

公益財団法人日本AED財団
理事長　三田村秀雄

★ 最優秀賞 ★

「福井県を中心にした心肺蘇生講習の普及活動」

受賞団体：特定非営利活動法人命のバトン

★ 優 秀 賞 ★

「福岡市教育委員会と消防の連携での救命教育」

受賞団体：福岡市消防局・福岡市教育委員会

★ 優 秀 賞 ★

「自由研究でのAEDマップが役立った人命救助」

受 賞 者：林 陽月さん、美弘さん、正隆さん

受賞者および受賞団体には、賞状と副賞として以下が授与されました。

【最優秀賞】……

・EOS Kiss M2　EF-M15-45　IS STM レンズキット	キヤノン株式会社
・Bリーグ 川崎ブレイブサンダーズ　ご招待ペアチケット	株式会社ディー・エヌ・エー
・サランラップ バラエティーギフト20	旭化成ゾールメディカル株式会社
・AEDのガシャポン、ペーパークラフト	日本光電工業株式会社

【優 秀 賞】……

・ミニフォトプリンター iNSPiC ZV-223	キヤノンマーケティングジャパン株式会社
・手首式血圧計HEM-6180	オムロンヘルスケア株式会社
・AEDのガシャポン、ペーパークラフト	日本光電工業株式会社

後援団体

厚生労働省
総務省消防庁
文部科学省
公益社団法人日本医師会
一般社団法人日本救急医学会
一般社団法人日本循環器学会
公益財団法人日本心臓財団
公益財団法人日本スポーツ協会
日本赤十字社
一般社団法人日本不整脈心電学会

協賛企業

旭化成ゾールメディカル株式会社
オムロン ヘルスケア株式会社
キヤノン株式会社
キヤノンマーケティングジャパン株式会社
株式会社 CU（CU Corporation）
日本光電工業株式会社
日本ストライカー株式会社
株式会社ディー・エヌ・エー
株式会社フィリップス・ジャパン
日本ライフライン株式会社
森ビル株式会社

減らせ、突然死　AED 推進フォーラム 2022

あなたも私も救命サポーター：全国に拡がるteam ASUKA

発　行　　2023年3月

発行所　　公益財団法人日本AED財団

〒101-0047 東京都千代田区内神田2丁目7-13 山手ビル3号館1階

TEL 03-3253-2111　FAX 03-3253-2119

URL https://aed-zaidan.jp/index.html

AED

どこにある？

AEDによる救命処置は、
一刻を争います。
いざという時、すぐに使
えるよう、AEDの設置
場所を普段から把握して
おきましょう。

公益財団法人
日本AED財団